

疑わしい人は特殊詐欺に遭わないのか？ —高齢者に対する意識調査からの検討—

社会学研究科社会心理学専攻博士後期課程2年

滝口 雄太^{※1}

要約

特殊詐欺における被害は非常に問題視されており、効果的な対策が早急に求められている。被害者の大半が高齢者であり、被害を食い止めていくためには、なぜ被害に遭ってしまうのかを正確に理解する必要がある。そこで、本研究では、高齢者を対象にして、高齢者を取り巻く環境、心理的要因、そして、詐欺対策として役立つ知識の獲得状況について探索的に把握し、被害の遭いやすさの見積もり（脆弱性の認知）への影響を明らかにすることを目的とした。高齢者施設に通う99名に質問紙調査を実施した。単純集計を行った結果、「オレオレ詐欺」は広く認知されていたが、他の詐欺や犯行手口はあまり知られていなかったことが示された。また、脆弱性の認知に関して、8割の高齢者が被害には遭わないだろうと考えていることも明らかになった。さらに、騙されてしまうことの要因のひとつとして、疑い深さを比較したところ、脆弱性の高い男性は他者に対する疑い深さが高かった。最後に、脆弱性の認知を従属変数とした重回帰分析を行った結果、女性の高齢者においてのみ、家族の有無と年齢が影響を及ぼしていた。すなわち、家族がいると、脆弱性が有意に低くなるが、年齢が高まると脆弱性は高くなる傾向が見られた。しかし、一般的疑わしさ尺度の下位因子はいずれも有意な影響を及ぼしてはいなかった。

キーワード：疑い深さ、一般的疑わしさ尺度、特殊詐欺、脆弱性

問題と目的

社会問題化した特殊詐欺の被害の状況

日本の犯罪状況の推移を見ると、特殊詐欺における被害は留まることなく、かなり深刻な

¹ 調査を実施するにあたり、桐生正幸教授（東洋大学）には多大なるご支援を賜りました。また、東洋大学社会学部の大学生にもご協力頂きました。心より御礼申し上げます。

状況であることが伺える。特殊詐欺というのは、オレオレ詐欺、架空請求詐欺、融資保証金詐欺、還付金等詐欺に分類されるような振り込め詐欺と振り込め詐欺以外の特殊詐欺（金融商品等取引名目、ギャンブル必勝法情報提供名目、異性との交際あっせん名目等の詐欺）のことを指している（警察庁, 2017）。警察庁が公開している特殊詐欺認知・検挙状況等についての統計によれば、ここ数年は若干の減少があるものの、平成29年度における被害額は394.7億円となっており、特殊詐欺の社会問題としての大きさは十分なものである。

さらに、特殊詐欺に関する議論の中で重大視されることは、特殊詐欺の被害者のうち約80%を65歳以上の高齢者が占めているということである（警察庁, 2017）。特殊詐欺の分類にしたがって、より詳細に見ていくと、オレオレ詐欺の被害者の95.9%、還付金等詐欺の被害者の93.1%、金融商品等取引名目の特殊詐欺の89.6%を高齢者が占めているという結果になっている。そのため、高齢者を中心として、特殊詐欺の被害防止に有効な対策を講じることが求められている。

特殊詐欺被害の対策と効果

近年における特殊詐欺の対策がどのように行われてきたのかを見ていく。警察庁（2017）の報告によると、最初は金融機関を通して行われていた詐欺に対して、金融機関への呼びかけや詐欺の犯行手口を紹介する内容を描いた広告の宣伝を行うことを中心に対策が行われてきていた。その結果、詐欺被害は減少したかのように思えてきたが、新たに金融機関を通さず、直接現金を受け渡すような手口や無人ATMなどに誘導するような手口が広まり、新たな対策を講じざるを得なくなってしまった。

現状の取り組みとして、取り締まりを強化すること、また、官民が一体となって予防活動を行うことが推進されている。今まで以上に、犯行の手口や被害に遭わないための注意点等の情報を積極的に発信しているのである。特に、被害の標的とされやすい高齢者に対しては、様々なメディアを通して広報を行ったり、民間のコールセンターに協力を仰ぎ、注意喚起を行ったりして、予防活動を進めている。これらの活動の目的というのは、詐欺に関する知識を人々が得ることによって、詐欺被害に遭遇しない、あるいは詐欺に遭遇した際に、騙されないようにするということである。日常的に、詐欺に対する構えを形成することができていれば、詐欺の犯行に抗うことができ、さらには、被害に遭いにくくなることが可能となる。しかし、これらの予防活動が本当に有効であるかどうかを検証することは難しい。なぜならば、イタチごっこと言わんばかりに、何らかの手口について詐欺の対策を行えば、新たな手口が出てきてしまい、有効な対策も刻一刻と変化させなくてはならないためである。特殊詐欺の被害を最小に食い止めるためには、例えば、どのような特徴を持つ人が詐欺犯行時に騙されてしまうのかを検討していくことが必要である。そのような知見を積み重ねることで、個々に合わせた適切な取り組みが生み出されると考えられる。

なぜ被害に遭ってしまうのか

特殊詐欺の犯行は往々にして、何らかのコミュニケーションを介して行われるケースがほとんどである。しかし、我々は基本的に他者との相互作用において、他者が真実であると仮定している (Levine, 2014)。そのため、たとえ初対面の相手であったとしても、自分を騙そうとしてくる可能性を考慮することは難しい。これは、McCornack (1992) が提唱する真実バイアス (他者のメッセージが真実であるとみなす傾向) ととも一致している。日常を取り巻く環境の点から考えると、警察官などの職業のように、嘘に対する鋭敏さが身に付いていない限りは、他者とのコミュニケーションに潜む虚偽の意図を常に認識していることはかなり認知的な負荷があると考えられる (Masip, 2014)。加えて、特殊詐欺の犯行は、犯行手口を意識させにくい構図になっている。具体的には、与えられた情報の真偽性を吟味するための時間を与えずに、短時間のうちにターゲットに判断をさせるよう促したりすることである。これは自分の欺瞞行為を隠蔽するために取られる行動と重なる部分がある (DePaulo et al., 2003)。

犯罪被害に遭う被害者に視点を当てると、上記のような被害が起こる際の状況以外にも、デモグラフィック変数の影響があると示されている (Lichtenberg, Stickney, & Paulson, 2013; Lichtenberg, Sugarman, Paulson, Ficker, & Rahman-Filipiak, 2016)。例えば、Lichtenberg et al.(2016) は、年齢が若く、教育歴が長く、抑うつ傾向が高い人ほど詐欺被害にあった経験があるということを明らかにした。

デモグラフィック変数以外にも、詐欺被害者の詐欺に対する脆弱性 (vulnerability) の認知に着目している研究も見られる (島田, 2011; 渡部・澁谷・吉村・小久保, 2015)。脆弱性が高い場合には、「私は被害に遭わない」という認識を持っていることを示す。渡部ら (2015) の分析によると、特殊詐欺被害に対する脆弱性を高めてしまう要因として、ヒューリスティック方略による意思決定を多用することを挙げている。この意思決定の特徴は、与えられた情報についてよく考えることなく結論を出してしまうことであり、それゆえに、真実に紛れた嘘や不正確な情報を見落としてしまうのである。そして、このようなヒューリスティック方略による意思決定は、高齢者において顕著に見られることも示唆されている。同様に、島田 (2011) も、脆弱性における要因のひとつとして、年齢を取り上げており、高齢者の持つ振り込め詐欺に対する犯罪リスク認知や犯罪不安が低いという問題を指摘した。実際の現実場面においても、詐欺に遭った被害者のほとんどは、詐欺に遭遇した際に、何の疑いもなく対応してしまったという報告をする場合も少なくない (消費者庁, 2016)。以上を踏まえると、詐欺に対する脆弱性がどのような要因によって規定されるのかを明らかにしつつ、科学的な根拠に基づいた対策を提案していくことが必要になる。

脆弱性を規定する状況的な要因

なぜ、人は自分が被害には遭わないだろうと考えるのだろうか。第三者の立場のときには、被害者自身に対して、特殊詐欺に遭う原因を過度に帰属させてしまうことにより、自分自身の騙されやすさを低く見積もる可能性がある（大工・阿形・釘原, 2016；Jones & Harris, 1967）。また、行為者と観察者という立場の違いにおいて、Jones & Nisbett(1971)は、行為者がある行動を外的に帰属するのに対して、観察者は内的に帰属するということを指摘した。実際に、特殊詐欺のような被害者にこの考えを応用すると、観察者は自分が当人ではないために、被害者の行動を内的に帰属させてしまうと考えられる。その結果として、現実場面における特殊詐欺といった問題に対する危機感が高まらず、自分は騙されないと考えてしまっているのかもしれない（大工・釘原, 2016）。

また、他者の動機や意図を推測したり判断したりするプロセスにおいて、認知的な側面が影響していることが示されている。Blair, Levine, & Shaw（2010）は、真偽性に関する判断を行う際に、認知的な負荷が課されているほど、システムティックな判断ができていなかったことを報告していた。特殊詐欺の手口には、被害者に対して認知的に負荷をかけるようなものが含まれるため、適切な判断ができなくなっているのかもしれない。しかし、観察者としての立場では、認知的な負荷がなく、実際の詐欺の状況とは異なっているために、このような状況における認知能力を軽視してしまっている可能性がある。

脆弱性を規定する特性的な要因：他者に対する疑わしさ

状況的な要因以外にも、人に備わっている特性的な差異によって、脆弱性の相違は生じているかもしれない。我々には基本的に、他者を信頼したり、反対に信用しなかったりする傾向が備わっている（Bond & DePaulo, 2008）。そして、このような信頼や不信の程度によって、情報処理のアプローチが異なることが示唆されている（Mayo et al., 2010）。他者への信頼のレベルの低い人の方が、情報を吟味するよりも、不当だとみなすことのできる状況そのものにアプローチする傾向がある。それゆえに、特殊詐欺の被害者に対して、これらの特性的な信頼や不信が異なることによって、脆弱性の認知も変わってくると考えられる。

本研究では、主に不信に着目し、Bond and Lee（2005）に従い、性質的な（dispositional）他者に対する不信のことを「疑わしさ」として扱っていく。その理由として、Kim and Levine（2005）が指摘するように、疑わしさはある状況や人物が含む不確実性を考慮する特性であり、認知的な側面にも影響を及ぼすためである。実際に、他者に対する疑わしさを特殊詐欺の場面に当てはめてみると、自分が被害に遭わないと考える人は、詐欺被害に遭遇しても、「そんな話は疑わしい」と冷静に判断できると信じているかもしれない。つまり、自分のことを騙してくるような場面で、相手の話を鵜呑みにせず、疑い深く対応することができるから、被害には遭わないと考える可能性がある。反対に、詐欺の場面の

みならず、あまり疑わしく思わない人は、詐欺に遭ってしまったときに、その状況を疑うことなく受け入れてしまうために、甚大な損害を被ることになってしまう可能性がある。したがって、他者に対する疑い深さの程度の高さが、脆弱性を低めると考えられる。

疑い深さに関しては、信頼感と相対するようと思われるが、滝口（2017）の研究では、信頼と疑いは異なる次元に布置していると指摘された。また、渡部ら（2014）は、信頼感は脆弱性に有意な影響を及ぼしていなかったと報告したが、この知見に従えば、疑わしさの程度は信頼とは異なって詐欺に対する脆弱性に影響を及ぼしている可能性があるかもしれない。脳機能の観点では、八田他（2015）が、中高齢者を対象として、高次脳機能、騙されやすさ、信頼感の関係を検討していた。その結果、騙されやすさと信頼の下位尺度である不信との間に正の相関がみられた。信頼感の下位尺度である不信は、疑い深さとも関連しているため、認知能力が低下しているような高齢者の疑い深さは、間接的に騙されやすさに影響しているかもしれない。

本研究の目的

本研究では、高齢者を対象にして、高齢者を取り巻く環境、心理的要因、そして、詐欺対策として役立つ知識の獲得状況について探索的に把握し、被害の遭いやすさの見積もり（脆弱性の認知）への寄与を明らかにすることを目的とした。特に、環境的に孤立していること、他者に対する疑わしさの低さ、特殊詐欺に関する知識が少ないことが被害の遭いやすさの見積もりを低めるかどうかを検討していく。

方法

本調査は、本学で実施されている講義「社会調査および実習」の中で行われた。この講義では、いくつかの学生グループに分かれ、社会調査を実施することを目的としており、著者はTAとして関わっていた。本調査を行うにあたり、著者は質問紙の作成に携わっており、実際の調査は学生グループが行った。

参加者

特殊詐欺の被害者の7割以上は高齢者であり、高齢者の持つ脆弱性認知を把握するために、60歳以上の高齢者を調査の対象者として設定した。そして、高齢者が集まり、一度に調査を実施できることから、高齢者施設に調査が可能かどうかを文書によって依頼した。最終的に、千葉県と埼玉県の2つの高齢者施設から承諾を得て、施設で行われるイベント参加後で、協力の同意を得られた高齢者に質問紙を配布し、回答を依頼した。2つの施設の回答者を合わせて99名分の回答（男性38名、女性61名、平均年齢81.95歳、SD=8.75）を得た。

質問紙

配布された質問紙は大きく3つの部分に分かれていた。(1) 基本情報(6項目): 高齢者の生活環境に関して、周囲の支援を受けることが困難な状況であるといった周囲との関係性を把握するための項目を含んでいた。(2) 特殊詐欺に関する知識や意識(4項目): 現行の特殊詐欺の対策は、被害に遭う際の犯行方法を紹介するといった、状況的な知識を享受することが目的とされている。こうした知識はどのくらい浸透しているのかを調べるために、知識について尋ねる。また、脆弱性に対する認知を測定するために、自分が被害に遭うと思うかどうかについて尋ねた。(3) 一般的疑わしさ尺度(15項目): 他者からの指示を疑うことなく聞き入れてしまう要因として、他者をあまり疑わしく思わない傾向があると考えられるため、疑い深さを測定した。質問紙の具体的な詳細は付録に示した。

結果と考察

家族との結びつきに関する調査の概要

基本情報について尋ねた項目について、単純集計を行った(Table1)。調査を実施した時点において、家族と同居しているのかについては、半数を越える70%の高齢者が、一緒に暮らす人がいるという結果であった。さらに、「離れて暮らしている家族がいるか」という質問に対しても、80%以上が家族との結びつきを持っていた。そのような家族がいる人物に関して、連絡の頻度を尋ねたところ、ほとんどの高齢者が、毎日やり取りしているか、あるいは週に1回、月に1回は連絡を取り合っている状況であった。また、家族も含んで、相談できる相手がいるかを尋ねたところ、ほとんどの高齢者が、相談できる相手がいると回答した。

Table1 高齢者の生活状況における各変数の出現度および割合

	回答数	回答率
同居している人 (N=97)		
いる	68	70.1%
いない	29	29.9%
離れて暮らす家族 (N=99)		
いる	82	82.8%
いない	17	17.2%
連絡頻度 (N=83)		
ほぼ毎日	18	21.7%
週1回	26	31.3%
月に1回	24	28.9%
3か月に1回	9	10.8%
半年に1回	4	4.8%
1年に1回	2	2.4%
相談できる人物 (N=96)		
同居の家族	57	59.4%
別居の家族	36	37.5%
友人・知人	15	15.6%
その他	3	3.1%
いない	1	1.0%

したがって、本研究の高齢者は、比較的、周囲との関係が良好で、そこまで孤立していないと示された。

特殊詐欺に関する知識

特殊詐欺には複数の種類や犯行手口があるため、これらの種類や犯行方法を知っているかどうかについて尋ね、その結果をTable2に示した。「オレオレ詐欺」については、「知っている」と回答した高齢者は全体の96%を占めており、最も認知されていた。その他の種類についても、「還付金等詐欺」が51%、「架空請求詐欺」が33%、「金融商品等取引詐欺」が25%、「融資保証金詐欺」が13%、「ギャンブル必勝情報詐欺」が8%となっており、「オレオレ詐欺」以外の詐欺はあまり認知されていないと考えられる。また、これらの6つの種類のすべてを認識している者は少なく（6.8%）、現状として、いずれか1種類のみしか知らない高齢者が多かった（43.2%）ことが明らかになった。

続いて、特殊詐欺の犯行の手口に関する知識の程度について述べていく。電話等によって、銀行などに行ってお金を振り込むように指示する手口については、62.6%の高齢者が知っていた。したがって、「オレオレ詐欺」という犯行の手口は一定程度には、知り渡っていると言えることができる。また、息子や孫、知り合いなどを装って、自宅などに直接的に現金を受け取りに来るという手口も54.5%が「知っている」と回答していた。しかし、警察官や弁護士などになりすまして、キャッシュカードや通帳などを要求するという手口については、37.4%の高齢者にしか知られていない状況であった。そして、多くはないが、犯行の手口がわからないという高齢者もいた。

Table 2 特殊詐欺をどのくらい知っているか

	知っていた回答者数	回答率
特殊詐欺の名称		
オレオレ詐欺	84	95.5%
架空請求詐欺	29	33.0%
還付金等詐欺	45	51.1%
融資保証金詐欺	11	12.5%
金融商品等取引詐欺	22	25.0%
ギャンブル必勝情報詐欺	7	8.0%
犯行の際の手口		
電話でお金を口座に振り込むよう伝える	62	62.6%
知り合いを装ってお金を受け取りに来る	54	54.5%
現金を宅急便や書留で送るように要求する	29	29.3%
警察官になりすまして通帳などを要求する	37	37.4%
わからない	10	10.1%

特殊詐欺に対する意識について

特殊詐欺を扱った研究では、犯罪への遭いやすさとして「脆弱性」という考えが提唱されている（大工他, 2018）。本研究でも、「自分が詐欺被害に遭うかもしれない」という項目に対する回答を脆弱性の指標として扱うこととした。その結果、「被害に遭わない」と思っている人は全体の51.6%を占めていた。反対に、被害に遭うかもしれないと感じている高齢者は、7.5%しかいない状況であった（Table3）。

調査から示されたように、自分が被害に遭う可能性を高く見積もっている人は少ない。このような被害の可能性に関する見積もりについて、被害に遭うと思うかどうかの認知に影響があるかどうかを検討するために、最初に「詐欺そのものをどのくらい知っているか」、「詐欺の犯行手口をどのくらい知っているか」の2つとの関係を調べた。なお、サンプル数が少ないことを踏まえ、脆弱性の調査結果から、詐欺に遭うかもしれないと考える「脆弱性低群」と詐欺には遭わないと考えている「脆弱性高群」の2つに調査参加者を分けて以降の分析で用いることとした。

まず、詐欺に関する知識数について検討していく。詐欺の種類を多く知っているということは、より多くの詐欺に関する情報に触れた結果であると考えられる。それゆえに、詐欺の種類を多く知っている人は、詐欺の危険性を間接的に体験しており、詐欺に遭う可能性を高く見積もっていると考えられる。そこで、2つの脆弱性群の間で、詐欺に関する知識数に差があるかどうかを検証するためにt検定を実施した。分析の結果、2つの脆弱性群の間に有意な差は見られなかった（ $t(83)=0.07, p=.94, d=0.02$ ）。同様に、犯行の手口に関する知識についても、2つの脆弱性群の間で差があるかどうかを検証したところ、有意な差は見られなかった（ $t(79)=0.37, p=.72, d=0.10$ ）。したがって、詐欺被害に遭う可能性を高く見積もるような人は、詐欺に関する知識を多く持っているわけではないということが示された。

Table 3 自分が詐欺に遭うと思うかの回答（N=93）

	回答数	回答率
遭わないと思う	48	51.6%
どちらかといえば遭わないと思う	26	28.0%
どちらかといえば遭うかもしれない	12	12.9%
遭うかもしれないと思う	7	7.5%

特殊詐欺への対策について

平成29年における警察庁の資料では、特殊詐欺対策の取り組みとして、高齢者の被害防止を意図した取り組みを行っていたことが報告されている。そのひとつとして、高齢者を取り巻く家族への働きかけが挙げられている。このように、詐欺の多様な犯行手口を踏まえると、高齢者とその周囲を意識した対策を行うことが望ましい。そして、警察庁をはじめとした関連部署の対策は、広告やチラシなどを用いて、多くの人に知ってもらうことが前提となる。ここでは、多様な呼びかけの成果として、どのくらい特殊詐欺の対策が実施されているかを把握するとともに、脆弱性との関連を検討していく。

本調査では、対策をどの程度行っているかを高齢者に尋ねていた。詐欺の対策として最も行われていることは、「情報収集する」ということであった（40.4%）。続いて、電話を用いた詐欺に向けた対策に関して、「非通知電話の拒否設定」や「在宅時の留守番電話の設定」といった対策はそれぞれ25.3%、23.2%の高齢者が行っていたことが示された。何の対策もとっていないという高齢者は約2割となっていたため、約80%の高齢者は特殊詐欺に向けた何らかの対策を行っていると考えられる。

多くの人が何らかの対策を行っていることが示された一方で、詐欺の遭いやすさの認知にはばらつきが見られる。詐欺被害の見積もりの程度によって、取っている対策が変わっている可能性もあるため、「特殊詐欺に対する意識」と「行っている対策」との関連を調べたが、 χ^2 検定を行った結果、有意な関連は見られなかった（Table4）。

Table4 特殊詐欺に対する意識と行っている対策のクロス表

	脆弱性高群	脆弱性低群	χ^2 値
非通知電話の拒否設定			1.089
している	21 (29)	3 (17)	
していない	52 (71)	15 (83)	
在宅時の留守番電話の設定			0.772
している	17 (23)	6 (33)	
していない	56 (77)	12 (67)	
自宅の電話番号の削除			1.736
している	5 (7)	3 (17)	
していない	68 (93)	15 (83)	
家族間での対策の話し合い			0.806
している	10 (14)	4 (22)	
していない	63 (86)	14 (78)	
テレビや新聞から情報収集			1.477
している	29 (40)	10 (56)	
していない	44 (60)	8 (44)	
特に対策をしていない			1.296
している	17 (23)	2 (11)	
その他の対策			0.072
している	3 (4)	1 (6)	

一般的疑わしさ尺度

先行研究では、日本の大学生を対象に疑わしさを測定したものはあるが（滝口, 2017）、高齢者の疑わしさを測定した研究は見られない。そこで、最初に因子分析を行い、因子構造を確認した。その後、脆弱性に対する認知は、疑い深い人ほど高いという仮説について検討した。

まず、尺度の構造を確かめるために、確証的因子分析を行ったところ、9項目を用いた2因子構造の当てはまりは十分であるとは言い難いことが示された（ $\chi^2 = 61.556$, $df = 26$, $p < .01$, $CFI = .689$, $RMSEA = .118$, $AIC = 117.556$ ）。そこで、項目分析によって、各項目の記述統計量を算出したところ、大学生のサンプルと異なって、「正直者は痛い目を見ると思う」という項目における平均値が低かった（ $M = 2.52$, $SD = 1.094$ ）。項目内容の表現方法等を変えたことが影響したために、このような当てはまりが変化した可能性がある。そのため、因子構造が大学生と高齢者で異なっていることを考慮して、再度、15項目を用いて探索的に因子分析を行った。

因子分析（主成分分析）を行い、各因子に対して負荷量が.50以上ある項目のみを選定した。その結果、2つの質問項目（「多く的人是、相手が聞きたいと思うことのみを伝えている」、「不正直は人の性質の一部である」）が分析から削除された。残った13項目について、因子分析（主成分分析、プロマックス回転）を行ったところ、2因子構造が確認された（Table5）。第1因子については、他者に対して疑う信念が反映した内容であることから「猜疑心」という因子が想定された。ここでの猜疑心というのは、個人が他者に対して抱く疑念とその疑念を象徴する考えとしての「人の不正直さ」を組み合わせた特性と言える。第2因子では、反対に、人の正直な心的状態を表しており、他者一般への信頼性を基本としている信念として、「信頼への安堵」としてみなした。

続いて、新たに確認した尺度の信頼性を検証するために、2つの因子を構成する項目についてそれぞれCronbachの α 係数を算出したところ、「猜疑心」では $\alpha = .83$ 、「信頼への安堵」では $\alpha = .77$ となった。また、この2つの相関関係をみると、弱い正の相関が見られた（ $r = .157$, $p < .01$ ）。この結果は、猜疑心が高いと、合わせて信頼への安堵も高いということを意味している。阿久津・立花（2018）が指摘するように、他人を信じる傾向が高い人は実際にだまされやすいわけではなく、相手に関する情報に敏感であることを考慮すると、この他者に対する鋭敏さが疑心となって表出されているのかもしれない。

最後に、特殊詐欺の脆弱性の違いが、一般的疑わしさの相違によるかどうかを検討するために、脆弱性を独立変数、一般的疑わしさの下位因子の尺度得点を従属変数としたt検定を行った（Table6）。なお、実際の被害者は女性が多いことを踏まえて、男女別に分析を行った。分析の結果、女性は脆弱性の差によって、下位因子ごとで得点の差はなかった（猜疑心： $t(25)=1.072, p=.294$ 、信頼への安堵： $t(36)=-1.203, p=.237$ ）。しかし、男性は被害に遭うかもしれないと感じている人の方が、他者に対する猜疑心が高かった（ $t(19)=-2.716, p=.014$ ）。信頼への安堵得点においては有意な差はなかった（ $t(26)=1.001, p=.326$ ）。

Table5 一般的疑わしさ尺度の因子分析（主成分分析，プロマックス回転）

	F1	F2
猜疑心 ($\alpha=.83$)		
初対面の人と会ったときに、その人はおそらく何かについて嘘をつくだろうと思っている	.794	-.126
他者が私に対して全く真実であるわけではないと感じる	.779	-.232
正直者は痛い目を見ろと思う	.681	-.306
嘘をつかないと言う人物の言うことは信じられない	.673	.149
誰かと会話しているときに、その人が本当のことを話しているかどうかしばしば疑問に思うことがある	.646	.178
見知らぬ人に道を尋ねるときに、その人が本当のことを話したかどうかしばしば疑問に思う	.645	-.018
人は誰もが嘘をつくと思う	.574	.059
人は本心を滅多にあなたに話さない	.540	.320
信頼への安堵 ($\alpha=.77$)		
人は滅多にあなたに対して嘘をつかない*	.016	.874
多くの人は、正直者が最も人間関係を築くのに良いという考えをもっていると思う*	.035	.839
人と話している時、その人の言うことを信じやすい方である*	-.104	.682
多くの人は基本的に正直である*	-.171	.674
人と付き合う上で、最も良いものは間違いが明らかになるまで相手を信頼することだと思う*	.380	.536
因子間相関		
	F1	.157

Table6 一般的疑わしさ尺度の因子ごとの得点

	女性		男性	
	猜疑心	信頼への安堵	猜疑心	信頼への安堵
詐欺被害意識が低い人	2.30 (0.73)	2.95 (0.61)	2.53 (0.44)	3.41 (0.66)
詐欺被害意識の高い人	1.94 (0.70)	3.31 (1.08)	3.44 (0.62)	3.05 (0.68)

被害の遭いやすさに影響している要因の検討

個人の脆弱性に影響を与える要因を検討するため、今回の調査で得られた犯行の手口に関する知識、家族の有無、年齢、同居人の有無、詐欺種類に関する知識の6つを説明変数、脆弱性の認知（1＝被害に遭わないと思う～4＝被害に遭うかもしれない）を目的変数とした重回帰分析を男女別に行った。その結果をそれぞれTable7、Table8に示した。決定係数は、男性で.12、女性で.18であり、性別にかかわらず、他の要因が影響している可能性が大きいと考えられる。男性では、すべての説明変数が有意ではなかった。その一方で、女性では、脆弱性の認知に対して家族の有無が有意な正の影響を及ぼしていた（ $B=0.81$, $SE\ B=0.39$, $\beta=.35$, $p<.05$ ）。この結果は、離れていても家族がいるという人の方が、詐欺被害に遭う可能性を考えるということを意味する。さらに、調査対象者の年齢が、脆弱性の認知に対して有意傾向ではあるが、負の影響を及ぼしていた（ $B=-0.34$, $SE\ B=0.02$, $\beta=-.31$, $p<.10$ ）。これは、年齢が上がると、女性では被害に遭う可能性を低く見積もる傾向にあると示していた。他の変数は影響を及ぼしていなかった。

Table7 男性の重回帰分析の結果

	B	$SE\ B$	$95\%CI$	β
(定数)	1.45	2.44	(-3.57, 6.47)	
年齢	-0.01	0.02	(-0.05, 0.04)	-.05
同居人の有無	-0.13	0.52	(-1.19, 0.94)	-.05
家族の有無	0.47	1.22	(-2.04, 2.98)	.08
詐欺種類に関する知識	0.19	0.12	(-0.06, 0.45)	.33
犯行手口に関する知識	-0.08	0.15	(-0.38, 0.23)	-.11
R^2				.12

Table8 女性の重回帰分析の結果

	B	$SE\ B$	$95\%CI$	β
(定数)	3.69	1.49	(0.68, 6.71)	
年齢	-0.34	0.02	(-0.07, 0.00)	-.31 *
同居人の有無	0.02	0.30	(-0.59, 0.62)	.01
家族の有無	0.81	0.39	(-0.02, 1.61)	.35 **
詐欺種類に関する知識	0.15	0.16	(-0.17, 0.47)	.20
犯行手口に関する知識	-0.03	0.14	(-0.32, 0.27)	-.04
R^2				.18

* $p<.10$, ** $p<.05$

展望

本研究の目的は、特殊詐欺に対する高齢者の現状を把握し、詐欺に対する脆弱性に影響している要因を検討することであった。質問紙調査の回答結果から、本研究の調査対象者は、比較的、自分が詐欺の被害には遭わないと考える脆弱性の高い者が多かった。そして、脆弱性の認知を目的変数とした重回帰分析の結果、女性においてのみ、有意な家族の有無の正の影響、また、有意傾向ではあるが、年齢の負の影響が明らかになった。

特殊詐欺の被害者のうち、女性高齢者の占める割合が多い。さらには、このような女性高齢者は、一人暮らしをしているケースが多いと報告されている（警察庁, 2017）。これは、本研究の結果と一致しており、家族のような繋がりを持つ心的な安心を提供しながら、認知機能が低下している高齢者には、さらなる対策を行う必要があると考えられる。脆弱性については、島田（2012）や渡辺ら（2014）が指摘するように、加齢による影響がある。しかし、年齢が上がることによって、脆弱性が高まるというメカニズムがどのように生じているかを把握するためには、認知機能や意思決定などを調べる必要があるだろう。

また、脆弱性の認知に対して、疑わしさは有意な影響を及ぼしていなかった。他者を疑うような傾向は、他者とのコミュニケーションにおいて、ネガティブな予測と関連しているが、これは自己の状態を把握することには寄与していないのかもしれない。しかし、疑わしさについては、被害の可能性を意識している男性は疑い深さ傾向が高いということが示されていた。この結果は、先行研究では見られなかったものであり（Masip, Garrido, & Anton, 2006）、被害の可能性を高く意識している者は、自身の利益を損失する事態を回避しようとするリスク回避と関連している可能性が考えられる。このように、リスク回避のような媒介している他の変数を考慮すれば、新たなモデルを得ることができるだろう。

また、本研究にはいくつかの課題が見受けられる。まず、脆弱性認知に関して、特に高齢者には、ポジティブ優位性効果というものがみられること（上野, 2008）、善悪の判断の能力（江口・米田・三村, 2016）といった変数が統制されていないことが挙げられる。また、脆弱性に対する認知をどのように測定するかという問題も指摘されている。今回は、高齢者自身の主観的な測定に依存しているため、客観的な指標による検討も今後は必要となってくる。いずれにせよ、「自分は被害には遭わないだろう」と考えていることと実際の被害にどのような関わりがあるかを見直したうえで、より脆弱性に即して、本研究で測定したようなパーソナリティレベルの影響を調べるのが確かかもしれない。

引用文献

- 阿久津洋巳・立花琴子（2018）. 調和性が高い人の信頼と疑い 岩手大学教育学部附属教育実践皇后センター研究紀要, 17, 51-59.
- Blair, J. P., Levine, T. R., & Shaw, A. J. (2010). Content in context improves deception

- detection accuracy. *Human Communication Research*, 36, 423-442.
- Bond, C.F. and DePaulo, B.M. (2008), 'Individual Differences in Judging Deception: Accuracy and Bias', *Psychological Bulletin*, 134 (4): 477-92.1.
- Bond, G.D. and Lee, A.Y. (2005), 'The Darkest Side of Trust: Validating the Generalized Communication Suspicion Scale with Prison Inmates', *Personality and Individual Differences*, 38 (6): 1429-38.
- 大工 泰裕・釘原 直樹 (2016). 詐欺場面における被害者への原因帰属が脆弱性認知に及ぼす影響 *応用心理学研究*, 41, 323-324.
- 大工泰裕・阿形亜子・釘原直樹 (2016). 被害者への共感的観察が脆弱性認知に及ぼす影響：詐欺被害事例を用いた検討 *対人社会心理学研究*, 16, 21-26.
- 大工泰裕・渡部諭・岩田美奈子・成本迅・江口洋子・上野大輔・澁谷泰秀 (2018). 詐欺被害防止のための取り組みの変遷と心理学の貢献可能性—米国における詐欺研究との比較を通して— *対人社会心理学研究*, 18, 179-188.
- DePaulo, B. M., Lindsay, J. J., Malone, B. E., Muhlenbruck, L., Charlton, K., & Cooper, H. (2003). Cues to deception. *Psychological Bulletin*, 129, 74-118.
- 江口洋子・米田英嗣・三村將 (2016). 高齢者の善悪判断に関する研究—騙されやすさの要因の解明— 三菱財団研究・事業報告書2016.
- Jones, E. E., & Harris, V. A. (1967). The attribution of attitudes. *Journal of Experimental Social Psychology*, 3, 1-24.
- Jones, E.E., & Nisbett, R.E. (1971). The actor and observer: Divergent perceptions of the causes of behavior. In E. E. Jones, D. E. Kanouse, H. H. Kelley, R. E. Nisbett, S. Valins, & B. Weiner (Eds.), *Attribution: Perceiving the causes of behavior*. Morristown, New Jersey: General Learning Press. pp.79-94.
- Kim, R., & Levine, T. (2011). The effect of suspicion on deception detection accuracy: Optimal level or opposing effects? *Communication Reports*, 24, 51-62.
- 警察庁 (2017). 特殊詐欺認知・検挙状況等 (平成29年・確定値) について https://www.npa.go.jp/bureau/criminal/souni/tokusyusagi/hurikomesagi_toukei2017.pdf (最終アクセス日：2018年9月12日)
- 警察庁 (2017). 平成29年版警察白書 日経印刷
- Levine, T. R., & McCornack, S. A. (1991). The dark side of trust: Conceptualizing and measuring types of communicative suspicion. *Communication Quarterly*, 39, 325-339.
- Levine, T. R. (2014c). Truth-default Theory (TDT) : A theory of human deception and deception detection. *Journal of Language and Social Psychology*, 33, 378-392.
- Lichtenberg, P. A., Stickney, L., & Paulson, D. (2013). Is psychological vulnerability related

- to the experience of fraud in older adults? *Clinical Gerontologist*, 36 , 383–416.
- Lichtenberg, P. A., Sugarman, M. A., Paulson, D., Ficker, L. J., & Rahman-Filipiak, A. (2016). Psychological and functional vulnerability predicts fraud cases in older adults: Results of a longitudinal study. *Clinical Gerontologist*, 39 , 48–63.
- McCornack, S. A. (1992). Information manipulation theory. *Communication Monographs*, 59, 1–16.
- Masip, J. (2014). Generalized communicative suspicion. In T. Levine (Ed.), *Encyclopedia of deception* (Vol. 1, pp. 404–406). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Masip, J., Alonso, H., Garrido, E., & Anton, C. (2006). Generalized Communicative Suspicion (GCS) among police officers: Accounting for the investigator bias effect. *Journal of Applied Social Psychology*, 35, 1046–1066.
- Mayo, R., Alfasi, D. and Schwarz, N. (2014). 'Distrust and the Positive Test Heuristic: Dispositional and Situational Social Distrust Improves Performance on the Watson Rule Discovery Task' , *Journal of Experimental Psychology: General*, 143(3): 985– 90.
- 夏原武 (2013) . 現代詐欺師シノギの手口 宝島社
- 澁谷泰秀・渡部論 (2012) . 高齢者における自己効力と詐欺犯罪被害傾向及び生活の質との関連性—高齢者の未来展望からの示唆, 青森大学・青森短期大学研究紀要, 35, 181–202.
- 島田貴仁 (2011) . 犯罪不安とリスク認知 小俣健二・島田貴仁 (編) 犯罪と市民の心理学—犯罪リスクに社会はどうかかわるか 北大路書房 pp. 2–22.
- 滝口雄太 (2017) . 日本語版GCSの作成の試み 東洋大学大学院紀要, 54, 77–88.
- 上田大介 (2008) . 高齢者のエピソード記憶におけるポジティブ優位性効果の関連要因と今後の課題 生老病死の行動科学, 13, 75–84.
- 渡部論・澁谷泰秀 (2014). 高齢者の詐欺犯罪脆弱性に対するtaxometric分析 秋田県立大学総合科学彙報, 15, 1–9.
- 渡部論・澁谷泰秀・吉村治正・小久保温 (2015). 秋田県在住高齢者の振り込め詐欺脆弱性の分析 秋田県立大学ウェブジャーナルA (地域貢献部門) , 3, 1–5.
- 山崎優子・仲真紀子・石崎千景・サトウタツヤ (2014) . 高齢者の自己や他者に対する信頼感が事件被害のリスク認知に及ぼす影響 立命館人間科学研究, 29, 3–17.

付録

この質問紙は、高齢者を対象とした特殊詐欺に対しての、防犯意識について調査するものです。この調査の結果は、防犯意識や対策について検討する際、基礎資料として用いるもので、個人の回答内容は一切公表されません。また、回答したくない質問があった場合、回答しなくても結構です。ご協力よろしくお願いします。

(1)ご回答を統計的に分析するために、失礼ですが、あなた自身のことについてお伺いいたします。

1. 性別を教えてください

1, 男性 2, 女性

2. ご年齢を教えてください () 歳

3. 現在、あなたには一緒に暮らしている方がいらっしゃいますか。

1, はい 2, いいえ

4. あなたには、離れて暮らすご家族がいらっしゃいますか。(子供や孫)

1, はい 2, いいえ

5. (4. で 1, はい と答えた方)

離れて暮らすご家族の方とはどれくらいの割合で連絡をとっていらっしゃいますか。

1, ほぼ毎日

4, 三ヶ月に一回程度

2, 週に一回程度

5, 半年に一回程度

3, 月に一回程度

6, 一年に一回程度

6. あなたは、身の回りに関することで気軽に相談できる方がいらっしゃいますか。

1, 同居の家族

4, その他

2, 別居の家族(離れて暮らす子供や孫など)

5, いない

3, 友人・知人

(2)特殊詐欺の手口についてご存知かどうかお伺いいたします。

1. 現在、特殊詐欺の手口は様々なものがありますが、どのようなものを知っていますか。

(複数回答可)

- | | |
|--------------|----------------|
| 1, オレオレ詐欺 | 2, 架空請求詐欺 |
| 3, 還付金等詐欺 | 4, 融資保証金詐欺 |
| 5, 金融商品等取引詐欺 | 6, ギャンブル必勝情報詐欺 |

2. あなたが特殊詐欺でお金を騙し取る手段について、知っているものを教えてください。

(複数回答可)

- 1, 銀行口座にお金を振り込んでほしいと電話などと言われる
- 2, 息子や孫、知り合いなどを装った者が、自宅などに直接お金を受け取りに来る。
- 3, 警察官や弁護士になりすました者が、キャッシュカードや通帳などを要求する。
- 4, 現金を宅配便や書留で送るように要求してくる。
- 5, 分からない。

(3)特殊詐欺に対する意識についてお伺いします。

1. あなたは、御自分が特殊詐欺にあうと思いますか。

- 1, 被害にあわないと思う。
- 2, どちらかといえば被害にあわないと思う。
- 3, どちらかといえば被害にあうかもしれない。
- 4, 被害にあうかもしれない。

2. あなたは、特殊詐欺についてどのような対策を行っていますか。(複数回答可)

- 1, 非通知電話の拒否設定をする(非通知電話に出ない)
- 2, 在宅時でも留守番電話の設定をする。
- 3, 自宅の電話番号を電話帳から削除する。
- 4, 家族間で対策を話し合う(合言葉を決める)
- 5, テレビや新聞で情報収集する。
- 6, していない
- 7, その他

--

あなたが感じていることについてお尋ねします。

以下の質問項目について、
あてはまる番号に○を付けてください。

全くそうではない	あまりそうではない	すこしそうである	とてもそうである
----------	-----------	----------	----------

1	人は誰もが嘘をつくと思う	1	・	2	・	3	・	4
2	嘘をつかないと言う人物の言うことは信じられない	1	・	2	・	3	・	4
3	他者が私に対して全く真実であるわけではないと感じる	1	・	2	・	3	・	4
4	多くの人、相手が聞きたいと思うことのみを伝えている	1	・	2	・	3	・	4
5	誰かと会話しているときに、その人が本当のことを話しているかどうかしばしば疑問に思うことがある	1	・	2	・	3	・	4
6	人は本心を滅多にあなたに話さない	1	・	2	・	3	・	4
7	人と付き合う上で、最も良いものは間違いが明らかになるまで相手を信頼することだと思う	1	・	2	・	3	・	4
8	不正直は人の性質の一部である	1	・	2	・	3	・	4
9	初対面の人と会ったときに、その人はおそらく何かについて嘘をつくだろうと思っている	1	・	2	・	3	・	4
10	多くの人、基本的には正直である	1	・	2	・	3	・	4
11	正直者は痛い目を見ろと思う	1	・	2	・	3	・	4
12	見知らぬ人に道を尋ねるときに、その人が本当のことを話したかどうかしばしば疑問に思う	1	・	2	・	3	・	4
13	人と話している時、その人の言うことを信じやすい方である	1	・	2	・	3	・	4
14	人は滅多にあなたに対して嘘をつかない	1	・	2	・	3	・	4
15	多くの人、正直者が最も人間関係を築くのに良いという考えをもっていると思う	1	・	2	・	3	・	4

Could people who are suspicious encounter the fraud? : A survey of the elderly

TAKIGUCHI, Yuta

Abstract

Recently, the fraud suffering is sever issue, therefore, the development of effective measures is needed. Indeed, the most of sufferer are elderly. To protect them, we must understand why the elderly would be caught the fraud suffering. The purpose of this study was to examine the environment surrounding the elderly, psychological trait and acquired knowledge for the fraud suffering, and indicate whether these factors have effect on their vulnerability. People who attend facility for the elderly ($N=99$, $M_{age}=81.95$) participated in this study. The result revealed that the most of elderly recognized “ore ore swindle”, but knew other kind of frauds and crime methods. Surprisingly, the 80 % of this sample considered themselves as not being caught the fraud suffering. In terms of suspicion that might be related to vulnerability, the men who were tend to show low vulnerability were more suspicious to others than those who were high vulnerability. The existence of family significantly increased the vulnerability of female, whereas the older age was tend to decrease them. The subscale of Suspicion Scale didn’t clearly contribute to their vulnerability. Future research was discussed.

Keywords : suspicion, generalized suspicion scale, fraud, vulnerability.